

関ヶ原まちづくりの方向性探る エイト日技らがトークイベント

エイト日本技術開発とロフトワーク（東京都渋谷区、諏訪光洋社長）の共催によるトークイベント「日常と観光 関ヶ原編」が9月25日、名古屋市中区のFabCafe Nagoyaで開かれた。古戦場で知られる岐阜県関ヶ原町のまちづくりを中心に、さまざまな形で地域の再生・活性化に取り組む登壇者が事例を紹介。今後のまちづくりの方向性や課題について意見を交わした。

イベントのサブタイトルは「遊休不動産から、まちの暮らしをたのしめる場所をつくるには？」。関ヶ原に移り住んだ開拓者や地元で活動する実践者らと共に、地域の活性化や新たな魅力づくりについて議論した。

冒頭、エイト日本技術開発ビジネスデザイン室の堀部修一氏が登壇。関ヶ原町と同社の関わりを振り返りながら、今後のまちづくりの在り方を展望した。町内を通る有料道路「伊吹山ドライブウェイ」は、同社の関連会社が2006年から運営している。7月末には町と「空き家等地域資源の活用に関する協定」を締結した。

堀部氏は、通過型の観光客が多いこと



などを課題に挙げ、「関ヶ原・伊吹山エリアの多様な魅力、空き家などの遊休不動産、当社が持つ公共インフラの総合力を掛け合わせながら、日常の中で小さな楽しみが生まれるような地域を、皆さんと一緒につくりたい」と呼びかけた。

続いて、関ヶ原ゼネラル・サービスの山口知加氏が「古戦場のまちのB面に光をあてる—アート、食、公園づくり」、彫刻家の土井木蓮氏は「開拓者の視点で捉えた関ヶ原の魅力」、岐阜市柳ヶ瀬で新たなまちづくりを手がける1級建築士の末永三樹氏（ミユキデザイン代表取締役）が「小さな『WANT』からはじめ

るまちの変革のデザイン」をテーマに、地域と人々の関わり方などで考えを語った。

最後のクロストークには、同町企画政策課の山口眞京氏、ロフトワーク顧問の矢橋友宏氏（FabCafe Nagoya代表取締役）が加わり、登壇者全員で関ヶ原のまちづくりを掘り下げた＝写真。

高齢化と人口減少で空き家や空き地が増える一方、町には不動産会社がなく所有者がどこに相談すればいいかわからないケースもある。こうした現状を踏まえ、堀部氏は私見として、エイト日本技術開発が不動産事業を展開することも選択肢の一つに挙げた。

議論では、小さな活動も継続することで多様な人が集まり、地域を支える力になるとの認識を共有した。持続可能なまちづくりには、巨額の資金や多大な労力を投じなくても、空き家などの地域資源を発掘・活用し、人々の日常に小さな楽しみや便利さ、出会い、挑戦の機会を生み出すことが重要だと確認。こうした活動を積み重ね、地域の魅力を継続的に高めていく考えを共有した。